フォン・ゲッツエ駐日ドイツ大使ご夫妻の熱海日向別邸訪問

お茶の水女子大学名誉教授　田中 辰明

はじめに

秋も深まり始めた2022年10月14日フォン・ゲッツエ(Dr. Clemens von Goetze)駐日ドイツ大使ご夫妻と一等書記官のゼーンケ・グロートフーゼン文化部長(Dr. Soehnke Grothusen)が熱海日向別邸を訪問された。フォン・ゲッツエ大使は以前は駐中国大使であった。メルケル首相時代はドイツは日本より、中国を大切にしていた。しかし政策の変更により、中国より、日本を大切にするようになり、フォン・ゲッツエ大使が駐日大使として赴任された。ベルリン出身の実力大使である。大使は日本文化の理解に尽力されている。

建築家ブルーノ・タウトはベルリンに1920年代に12000戸の集合住宅を建設している。大使のご両親もタウトが設計した住宅に住んでいたことがあり、タウトファンである。タウトはナチス政権を逃れて来日し3年と5ケ月を日本で生活した。タウトはベルリン工科大学の客員教授もしていたので、来日すれば、東京帝国大学教授くらいに迎えてもらえるであろうと考えていたのであったが、当時の日本政府はナチスと共にやっていこうと考えていた時代であったので、そう簡単にはいかなかった。やむなく、高崎の少林山達磨寺の洗心亭に籠り、桂離宮や伊勢神宮の簡素な素晴らしさを世界に紹介する著作に専念した。大使ご夫妻は2022年5月12日に少林山だるま寺を訪問されている(写真1，2)。筆者も同行したが、洗心亭、達磨寺を広瀬正史住職のご案内でつぶさにご覧になっている。その時にタウトの我が国に残る唯一の作品が熱海の日向別邸であることを知られ、見学を希望されていた。しかし公務の多忙もあり、実現したのが2022年10月14日であった。

写真1　高崎の少林山達磨寺で広瀬正史住職から寺院の説明を受けるゲッツエ駐日ドイツ大使（2022年5月12日）

写真2　少林山達磨寺講堂におけるゲッツエ駐日ドイツ大使と筆者

1．日向別邸

大使ご夫妻は東京の大使館を公用車で出発、午前11時に熱海の日向別邸に到着された。日向別邸玄関で斎藤栄熱海市長の歓迎を受け(写真3)邸内に入られた。

日向別邸は日本に残る唯一のブルーノ・タウトの作品である。日向別邸は2005年に熱海市指定有形文化財に指定された。2006年には日本国の重要文化財に指定されている。この建物は1933年から1936年の間にかけて日向利兵衛により建築された住宅兼ゲストハウスである。この建築に携わったのは渡辺仁(1887～1973)とブ

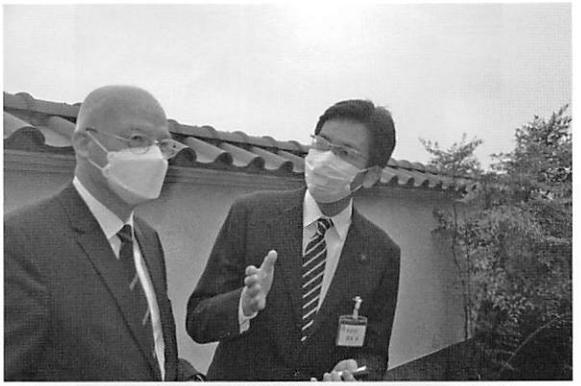

写真３　日向別邸玄関で斎藤栄熱海市長の出迎えを受けるゲッツエ駐日ドイツ大使

写真４　東京中央郵便局

ルーノ・タウトの建築家２人と清水組である。ブルーノ・タウトは地下室部分を担当した。

この建物は木造の２階建である。上屋の擁壁を兼ねて人工の庭園が作られた。これは建物の南側、相模湾に面した方向に当たる。この人工庭園の下に地下室が作られ、この設計をブルーノ・タウトが担当した。

建築家渡邊仁は旧第一生命ビルの設計者として有名である。渡邊仁は他に、横浜ニューグランドホテル(1927年)、銀座和光(1932年)、東京国立博物館(1937年)などを設計している。昭和の建築史の重要建築物を手掛けた大建築家である。

日向別邸は３つの工期に分けられる。一期工事は傾斜地に立つ木造２階建ての建物である。２期工事として基礎部と屋上庭園が造られた。３期工事としてタウトが基礎部の躯体を使用して地下室を作った。３期工事では棟梁の佐々木嘉平(1889～1983)が腕を振るった。

タウトは1935年５月に日向別邸の設計を始めた。東京中央郵便局(写真４)を設計した吉田鐵郎(1894～1956)がタウトの設計を手伝っている。タウトは東京には西欧の建築を模倣した建築が多いと批判した。タウトが例外的に絶賛したのが吉田鐵郎が設計した東京中央郵便局であった。

発注者であった日向利兵衛(1874-1939)は大阪の実業家であった。彼は極めて工芸的、芸術性の高い家具類を販売する「唐木屋」の一人息子として生まれた。彼は語学が得意で、幅広い人脈を持っていた。そして語学力と人脈を生かして貿易活動を行った。特にアジア貿易で財を成し、また美術、建築に造詣が深かった。そして特に紫檀、黒檀の貿易に力を入れた。日向利兵衛はタウトがデザインした電気スタンドを銀座のミラテス工芸店で購入し、タウトのデザイン能力に感銘を覚えた。そこで熱海に既に完成していた邸宅の鉄筋コンクリートの下部構造にできた空間に居間と社交場を作るようにタウトに依頼した。この場所は半地下室に当たる。施工は清水組(現在の清水建設)が担当した。またタウトの設計に基づき大工仕事を行ったのは、棟梁佐々木嘉平であった。タウトは日向別邸において、竹をはじめとする日本的な素材を使用し、桂離宮の面影が見られる設計を行った。桂離宮では竹が多く使用されたが、日向別邸でも竹が好んで使用された。

洋間も傾斜地に建設されたので、段々がある。桂離宮では古書院の前に月見台がある。月見台に座り、中秋の名月の日に前面にある池の上に上がる月を楽しめるように設計されていた。タウトは２回桂離宮を訪問し、感激をした。そして日向別邸の設計では洋間の段に座り、やはり中秋の名月に前面の相模湾に上がる満月を楽しめるようにした。洋間の床は黒色の楢材の寄木張りが使用され、満月の明かりが床に反射したそうである。

１階から階段を下りて、タウト設計の社交室に入るところに、４段の半円の小さな階段がある(写真５)。４本の真竹がm字型に曲げられ、半円を描く階段の手すりとなっている。結合部分は棕櫚縄を用いて垣根風に仕上げられている。階段の踏み板はチーク材が用いられ、丸みを持つ段鼻を設けている。階段の踏面(ふみづら)は手すりの竹を貫通させ、これがぐらつかないように強度を持たせている。蹴上部分には桐の板を用いる繊細な仕上げとなっており、斬新な日本風階段が作られた。

社交室のの東側はアルコーブとも見て取れる部分である。竹を多彩に使用した空間である。壁には細竹を交互に詰張りし、細竹の節を最大限に残している(写真６)。

写真5　日向別邸の社交室に入る小さな階段

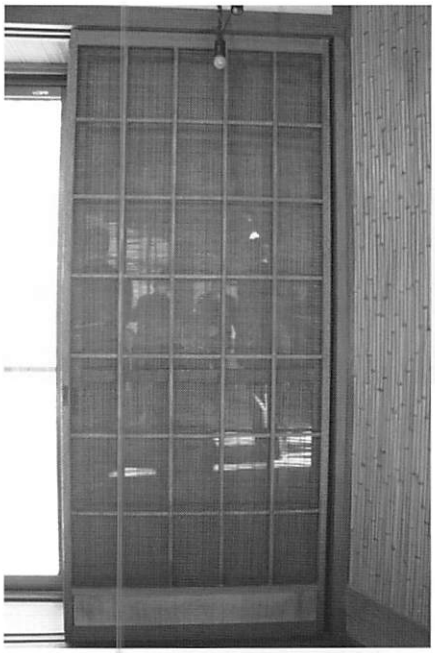

写真6　細竹を交互に詰張りした社交室の壁

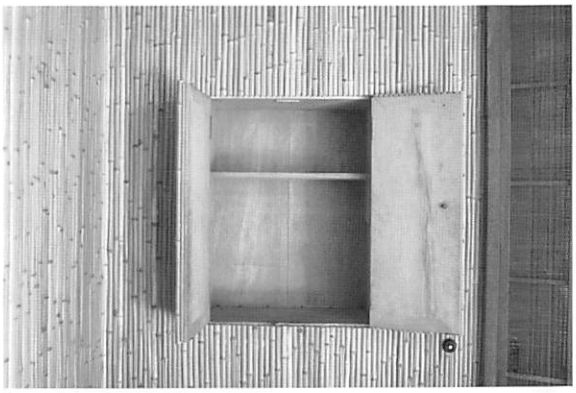

写真7　細竹の壁に設けられた隠し扉

写真8　桐の板を小さな幅で張った天井

この細竹の壁には2ケ所に隠し扉が設けられている。小さいほうの隠し扉の中には電話の受話器が置かれていたそうである。大きい方にはウイスキーなどが収納されていた(写真7)。

天井は桐の板を小さな幅で詰めて貼ってある。印象的な直線が示されている(写真8)。床は檜材が使用され、矢筈張り[1]となっている。細竹の隅角部には漆で仕上げた三角棚が設けられている。

タウトが設計依頼を受けた時点では現在の開口部に当たる部分に鉄筋コンクリートの擁壁があった。タウトはこれを取り払いガラス戸による大きな開口部を設けた。当時ドイツでは開口部が少ない建築が主流であった。タウトやバウハウスの初代校長となったグロピウスは大きな開口を取る建築を設計した。タウトが1933年に日本に脱出する直前まで住んでいたダーレビッツの住宅でも大きなガラスの開口が用いられた(写真9)。相模湾に面する方には通風と日よけを考慮し、葦障子(よししょうじ)が用いられている(写真10)。これは関東には少なく、関西に多い手法で、恐らくタウトが京都滞在中に見た建築を参考にして作ったものであろう。

社交室東側のアルコーブ部分から社交室にかけて天井を区分けする境界がある。ここに煤竹(すすだけ)を吊るし、裸電球が吊るされている(写真11)。これはタウトが京都の八坂神社で見た夏祭りで屋外にぶら下げられてい

写真 9　ダーレビッツのタウト住宅の開口部

写真 10　相模湾の面する開口部に設けられた葦障子

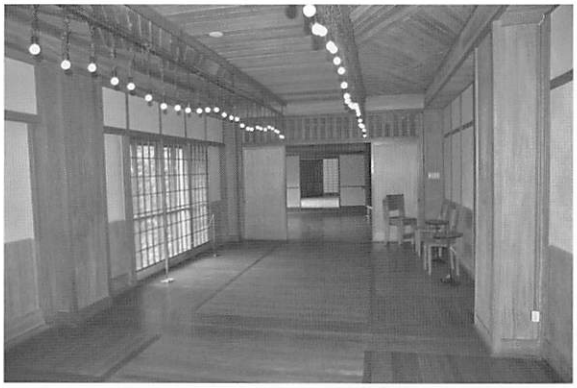
写真 11　社交室に設けられた裸電球による照明

写真 12　日向別邸、洋間の客室

写真 13　ダーレビッツのタウト自邸居間

た白熱電球にヒントを得たものという説がある。また日向別邸から見下ろす相模湾で漁をするイカツリ船の漁火(いさりび)にヒントを得たものであるという説もある。これは２列設けられており、相模湾側には49ケ、内部側には56ケの電球がぶら下がっている。設計が行われ、またその直後にタウトはトルコのイスタンブールに赴くのであるが、タウトが56歳、伴侶エリカが49歳の時であった。ここにはこのような遊びも隠されている。社交室としての華やかさは、連なった裸電球とレモンイエローの微妙な色彩を持つ、漆喰塗の壁がその役割を果たしている。

社交室に続き、洋間の客室が存在する(写真12)。社交室と洋間客室との仕切りには大和格子[2)]風の欄間があり、桐板の襖４枚が収納されている。タウトは開口部を最大限に生かし、相模湾の眺望を尊重した。相模湾は東に面し、日向邸から日の出、月の出を楽しむことができた。また日向別邸に隣接して繁る樹木を楽しむこともできた。内装は布地にワインレッドで染色したものである。日向別邸は傾斜地に建設された。岩盤の上に部屋が作られた。洋間にも段々があり、蹴上は下段から150㎜、165㎜、180㎜、200㎜、185㎜と変化を持たせ、約１ｍの高低差をおさめている。踏面の幅も変化に富み、下段から350㎜、390㎜、325㎜、360㎜としている。客人はこの段に座り、相模湾の青い景色、近くの緑の樹木を楽しんだのである。この青と壁のワインレッドは色彩学で言う補色の関係にある。きつい感じを与えるが、この

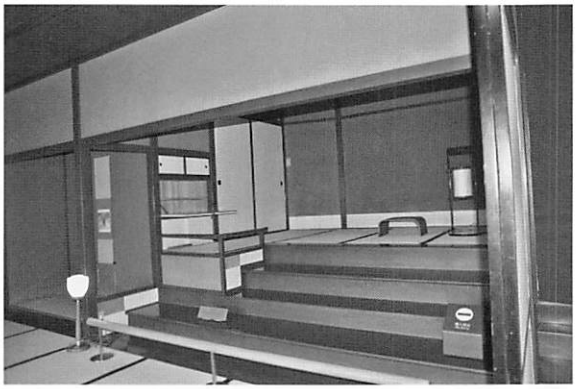

写真 14　日向別邸和室

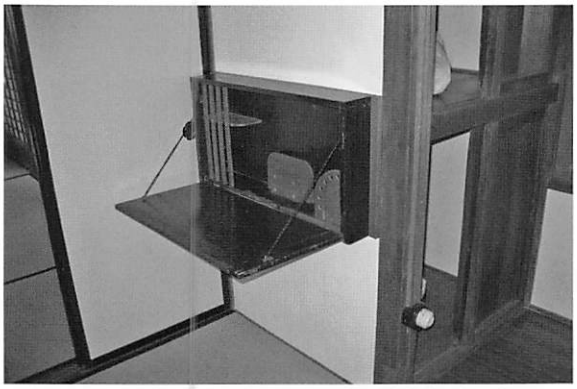

写真 15　エリカがタウトの口述筆記を行った洗心亭の書見台

写真 16　日向別邸和室の書見台

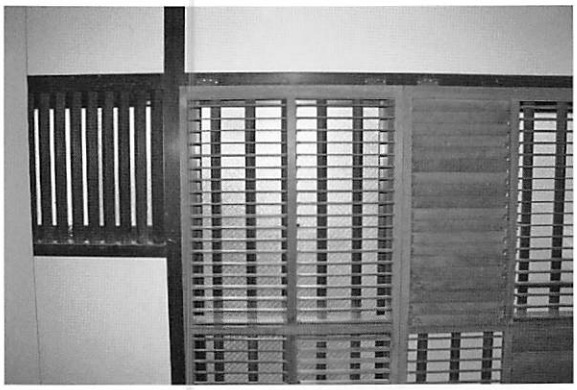

写真 17　日向別邸縁側の蔀戸

組み合わせはタウトのダーレビッツの自邸居間(写真13)とよく似ている。ダーレビッツの住宅居間にも段々があり、ここに座り、大きな開口部を通してダーレビッツの森を楽しむように設計されている。ダーレビッツの住宅の天井もワインレッドに彩色され、考え方は極めて近い。

洋間に続き和室がある(写真14)。12畳に相当する広さである。天井は神大杉が使用されている。神大杉は1000年以上地中に埋もれていた杉を言う。極めて貴重な材木である。これが地上に出た時には青黒く変色するそうである。しかし、日向別邸和室天井の木材は春日杉との説もある。天井板は波状に重ねられている。和室は日向利兵衛が商人であったことから、商家の帳場を模した場所がある。タウトは高崎の少林山達磨寺の洗心亭で沢山の著作を行った。タウトが口述し、エリカがそれを速記し、あとで清書した。エリカの作業場所は狭い洗心亭の書見台であった(写真15)。タウトはエリカに感謝をし、この和室にも書見台(写真16)を設けた。タウトは和室の設計には大変苦労したことを記している。何度も建築家吉田鐵郎、棟梁の佐々木嘉平と相談を行っている。

和室に続き、縁側がある。縁側には通風と日よけに配慮し、ガラリ付の蔀戸[3)]がある(写真17)。蔀戸は室内側に開くようになっている。天井から吊り下げられた金具に引っ掛けて開放するようになっている。大和天井(ささら天井)に床は黒瓦が四半敷きに収められている。壁は白色の漆喰塗りである。

日向別邸が完成したのち、タウトは次のように述べている。「全体として明解で厳密である。ピンポン室、洋風のモダンな居間、日本座敷、日本風のヴェランダを一列に並べた配置は素晴らしい階調を示している。」タウトはこの部屋を、ベートーベン、モーツアルト、バッハと呼んだ。

日向利兵衛は設計の依頼に当たりタウトに大変な敬意を払った。熱海の郊外の漁村上多賀に民家を借りてタウトとエリカに住まわせた。

日向別邸はその後、民間企業に買われ、同社の保養所として使用された。その後東京の篤志家により買い上げられ、篤志家は2004年に熱海市に寄贈、熱海市の所有になり、今日に至っている。2020～2022の間に大規模

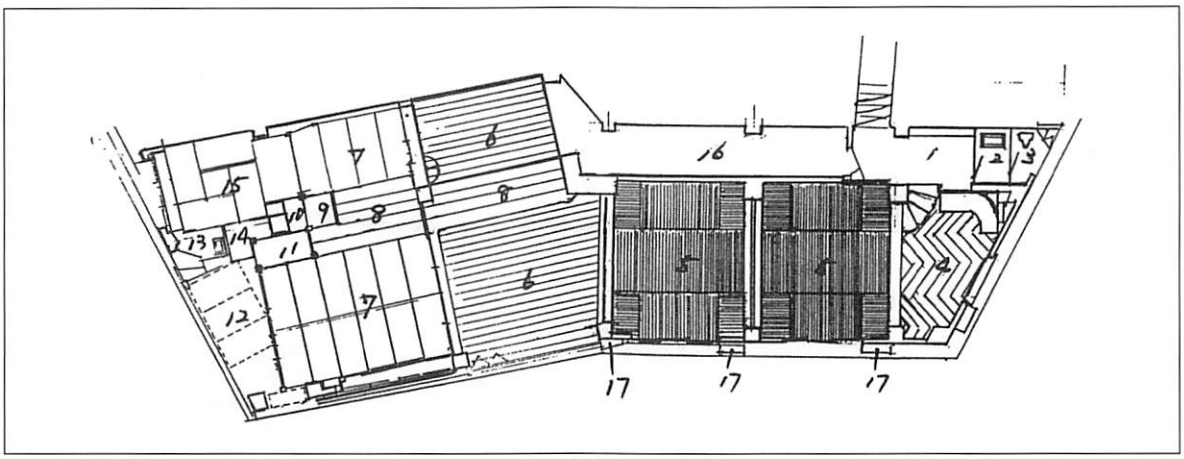

図1　タウトが設計した日向別邸地下室の平面図 4：アルコーブ、5：社交室、17：相模湾に面する開口部、6 洋間 7：和室、8：段々、12：縁側、15：和室に繋がる 4 畳半の和室。

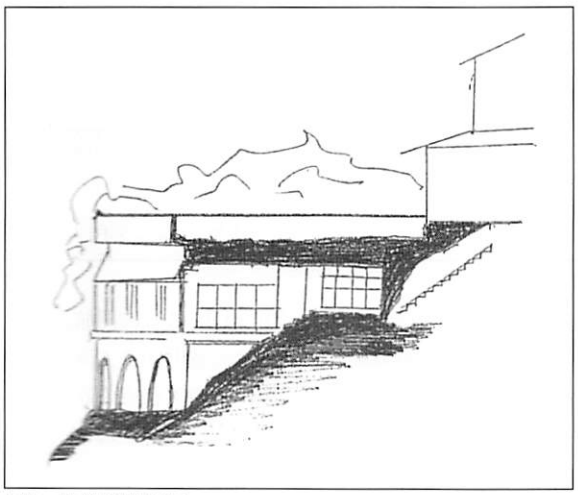

図2　日向別邸断面図

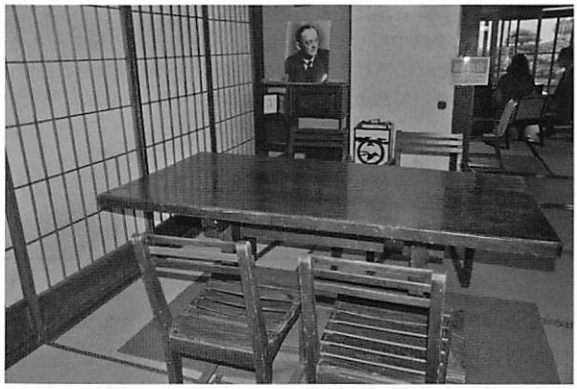

写真 18　上多賀の蕎麦屋に保存されているタウト作の机と椅子

写真 19　釘を使わず、銅線で緊結したタウト作の木製椅子

な改修工事が行われた。

日向別邸のタウトが設計した地下室部分の平面図を図1に、日向別邸の断面図を図2に示す。

2．上多賀の蕎麦屋

大使ご夫妻は昼食を上多賀の蕎麦屋で取られた。この蕎麦屋さんの建物は日向別邸の発注者であった日向利兵衛の別荘であった。これは日向氏が山中にあった農家を買い取り上多賀に移築し、別荘としたものである。移築と改修に当たり、タウトが協力をしている。日向氏はこの別荘の近くに家屋を借り上げ、タウトとエリカはそこに住み、熱海日向別邸の工事監理にあたった。熱海日向別邸の工事が終了するとタウトとエリカは一旦高崎の少林山達磨寺に戻るが、招聘を受けたトルコのイスタンブールの芸術アカデミー(現在ミマール・シナン大学)教授として赴任の為1936年10月15日に下関から関釜連絡船に乗船し、日本を去った。上多賀居住中タウトは自分たちで使用するために木製の机と椅子を作った。熱海の

七月二十七日（土）　上多賀 ― 上棟式

日向氏の移築家屋の上棟式が行われた。棟の上には、青竹に弦を張り矢を番えた大きな弓矢の飾物を仕立て、傍らに神道の御幣が立ててある。その下で大工や鳶職が酒を飲み、歌ったり踊ったりするのである。私達が水浴みを終えてから現場へ行ってみたら、ひとりの職人が自分で歌いながら踊っているところであった、しかし唄の文句の切れ目へ来ると、大勢が囃し言葉を挿むのである。

私達の家から庭や海、また山への眺めはすばらしい。この家は風通しがよくて、いかにも夏向きにできている。

八月七日（水）　上多賀 ― 七夕祭

日本語の『建築』という言葉は、『建』が垂直に立てること、『築』が水平に築くことを意味する、すると『建築家』は、構造家という方が當っているようだ。また主たる大工は『棟梁』と呼ばれているが、これは『棟木』と『梁』の意である、だから大工という語より具象的だ。

いま多賀の大工に頼んで、椅子と重いテーブルとを松材で造らせている、もともとここに滞在している間だけの使用に供するつもりであるが、日向氏は私達が多賀を引上げる際には、これを自分に譲ってほしいと言っている、例の田舎家の廣間に使いたいのだそうである。私も近頃は、家具の設計ばかりを職とするようになった。本来の建築から離れて、もう三年余りを無為に過している。私は決してボヘミアンではない、しかし今日の世界では、何人と雖も自由に安住の地を求めるわけにはいかないのだ。一切が徒らに過ぎ去りゆく、今日は紅顔、明日は白骨である。私は流浪を厭う気持が次第に濃くなってきた、だが今のところ何人も私を本来の職業に返してくれることはできない。ともすれば焦立ち易い不安の念を強いて落着けねばならない、だがこれは容易ならぬ努力だ。いずれにせよ、一切事を自分に都合よく仕向けるなどということが、今日誰にできるだろう。

村は七夕祭で美しく飾られ、行き来の人々の足を停めさせる。暗褐色にくすんだ家々の前には、葉をつけたままの青竹を立て、それに吊した短冊形の白紙や赤・黄・青などの色紙には、家族や親しい知合いの名前が認めてある（少林山のには、私の名も書いてあった）。清楚な竹葉の間に吊られた細長い色紙は、風にひらひらと揺れまた明るい陽光に映じてこの上もなく美しい。こういう七夕の飾りが、村の通りにずらりと並んでいるところもある。七夕は牽牛、織女の両星が一年中でいちばん接近する晩である。しかし明日になってこの両つの星がまた互に遠ざかり始めると、これらの飾物は海や川へ投げ込まれて、再びもとの元素に還るのである。こういう美しい行事に無縁な欧米人は、甚だ『美しからぬ』人々というべきであろう。

岩波書店「日本 タウトの日記 一九三五年 一九三六年」より

日向別邸が完成するとタウトはこの机と椅子を発注者の日向利兵衛に寄贈した。上多賀の日向別邸はその後、蕎麦屋を経営する渡辺氏により買い取られ、現在に至っている。従って制作の机と椅子も現在は蕎麦屋さんが管理保管している。本来２階に保存しているのであるが、ドイツ大使のご来店というので、渡辺店主はそれを１階に降ろし、大使ご夫妻に披露した。椅子の木材は釘を使用せず、銅線で緊結してある。こうすることで、座る時の衝撃を和らげるという多賀の大工の細やかな配慮である（写真18, 19）。

上多賀におけるタウトの生活はタウトの日記に詳しく記述されている。当時の上多賀の状況を日記でご理解頂きたい。岩波書店「日本 タウトの日記 一九三五年 一九三六年」（篠田英雄訳）より、1935年７月27日、８月７日を引用する。

３．MOA美術館

昼食後大使ご夫妻はMOA美術館を訪問された。

MOA美術館（エムオーエーびじゅつかん、MOA Museum of Art）は、静岡県熱海市桃山町にある私立美術館である。1982年（昭和57年）１月11日に開館。岡田茂吉の収集品を収蔵展示、運営は公益財団法人岡田茂吉美術文化財団である。建築工事は竹中工務店の設計施工であった。

前身である熱海美術館（あたみびじゅつかん）は、1957年（昭和32年）１月１日に開館した。

MOA美術館は、約11か月に及ぶ改修工事を経て、2017年２月５日にリニューアルオープンを迎えた。

展示スペースの設計は、世界的に活躍する現代美術作家・杉本博司氏と建築家・榊田倫之氏によって主宰される「新素材研究所」が手がけた。屋久杉、行者杉、黒漆喰、畳など日本の伝統的な素材を用いつつ、展示される作品の美を最大限に生かす展示空間を創出している。茶室一白庵は、当館創立者岡田茂吉の生誕100年を記念して、百の字を一と白に分けて「一白庵」と命名した。設計はワシントンにある日本大使館の茶室を手掛けた江守奈比古氏である。大広間、広間、小間、立礼席のある茶室である。大使ご夫妻は館内の展示物をくまなくご視察の後、この一白庵で華道と茶道を楽しまれた。華道は花を生けることで、その美しさや命の尊さを表現する日本の伝統芸能であるとの説明を受けられた。さらに華道に使用される

写真 20　MOA 美術館―白庵で華道の説明を受けるフォン・ゲッツエ駐日ドイツ大使ご夫妻

写真 21　MOA 美術館―白庵で茶道の説明を受けるフォン・ゲッツエ駐日ドイツ大使ご夫妻

花鋏、剣山や七宝などの花留めの説明を受けられた。そして実演を鑑賞された(写真20)。茶道では湯を沸かし、茶を練るか立てる、茶をふるまう日本の伝統の行事であるとの説明を受け、茶を楽しまれた(写真21)。

4．おわりに

大使ご一行の熱海訪問については熱海ブルーノ・タウト連盟(矢崎英夫代表)が受け入れの綿密な準備をしてくださった。熱海市も斎藤栄市長が大使ご一行を日向別邸でお迎えし、歓迎のご挨拶を頂いた。上多賀の蕎麦屋さん(渡辺店主)も一般の営業日にもかかわらず、保存品のタウトの机と椅子をお見せいただいた。最後の訪問先であったMOA美術館でも正面玄関に日独の国旗を掲揚して頂き、館内をくまなくご案内頂いた。また、茶道、茶道のお点前をご披露頂いた。大使からも「日独が困難な時代に天才建築家ブルーノ・タウトを日本は受け入れ、タウトも日本文化の素晴らしさを感受しそれを世界に紹介した。日独文化交流の懸け橋として貢献した人であった。熱海市はそのタウトに活躍の場を与えた。今ウクライナ問題などで、世界は大変激動しているが、文化を創造していく事がいつの世にも重要な事で、人々に潤いを与えるものである」との挨拶があった(写真22)。

一日を通じて通訳をされたのはドイツ大使館通訳部長のベアーテ・フォン・デル・オステン(Beate von der Osten)女史であった。完璧な通訳をされるので、そばでお聞きし大変に感激した。伺うとベルリンの自由大学の東アジア研究所で日本学を研究され、日本語を習得されたそうである。それも当時の加藤周一教授に師事したそうである。実は筆者も1971年から73年の間ベルリンに住みベルリン工大ヘルマン・リーチェル研究所の研究員をしていた。そして偶然ではあるが、女史が研究していた東アジア研究所のすぐ近くの住宅に住んでいた。二人で、「世界は狭い！」と驚き合った。

写真 22　MOA 美術館で謝辞を述べるフォン・ゲッツエ駐日ドイツ大使（右は大使夫人、その右は通訳の Beate von der Osten 女史、その右は Dr. Söhnke Grothusen 一等書記官）

参考文献

1．田中辰明、柚本玲:建築家ブルーノ・タウト－人とその時代、建築、工芸」、オーム社2010
2．田中辰明、ブルーノ・タウト、中央公論新社(電子書籍もあり) 2012
3．田中辰明、ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会、東海大学出版会　2014

註

1．矢筈張り：矢筈とは弓の弦を受けるV形の端部の事である。さらに、やはず模様などのV形のものの総称。
2．大和格子：一般の格子よりも太い木材を使用した格子。奈良県は森林が多く、木材豊富であった。奈良の住宅は一般に太い格子が使用されたので大和格子と呼んだ。
3．蔀戸：格子に板を張った釣り戸。１枚戸と上下２枚に分かれる半蔀がある。平安時代に現れ、神殿造や社寺建築に用いられた。